
日向の王子物語

葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日向の王子物語

【Nコード】

N3543S

【作者名】

葉月

【あらすじ】

高校に入ってから初めての夏休み。部活をするべく学校への道を歩いていた日向^{ひなた}紘はあるものを見つけてしまう。

一端の高校生男児、日向紘が行く定番お姫さまストーリー『シンデレラ』

日向紘、王子として頑張ります！

シンデレラが出てきてからは完全にコメディ化しました……。

シンデレラ

これはある夏の日の物語である。

学校へ行く途中に俺こと日向^{ひなたこう}紘高校生男子はある物を見つけてしまった。

それを見つけてしまったためにこのような自体になってしまったわけだが。

あれを見つけないければ、こんな事にはならなかった筈だった。こんな面倒な事には巻き込まれなかった筈だったのだ。

あの時の俺に言ってやりたい。あーいう不審物は拾わない方がいい、何があっても触らない方が良かったんだ、無視すべきだったんだ！、と。

「何故拾ってしまったんだー、あの時の俺よおー」

机の上に突っ伏しながら日向は項垂れる。丸くて小さい机は、日向が体重を預ける事によりぐらぐらと不安定に揺れる。

意味もなく机を左右に揺らしてしまう日向であったが、しばらくするとそれにも飽きたのか、それとも意味のない事をしている自分にアホらしくなったのか、

机から手を離し座っていた椅子に体重を預けたため息をつく。

自分はこんな所で、一体全体何をやっているのだろうか。

自業自得な展開なのだが、やっぱり腑に落ちない。

ガチャ、と後ろから扉の開く音がして誰かが入ってくる気配がした。

「王子、そろそろ行きますよ」

後ろを振り向くと、そこには執事風の洋服に身を包んだ男性が、笑顔で日向に手を伸ばして、立っていた。

何故、このような事になったのか。それは今、問題ではない。問題なのは俺の今の立場が『王子』だと言う事だ。

王子と聞くとうすら寒い物を感じる男が、大半を占めていると思われる。

例えば、

王子と言えばイケメン、スレンダー、足が長い、歯が真っ白で笑顔の時にはキラリと光っちゃったりする。女の子に優しい。お手をどうぞとか言っちゃったりして、大抵の女の子はそんな王子にメロメロになる。

そして服はかぼちゃパンツ。ぴちぴち白タイツ。だったかも知れない……。

「制服で良かった・・・」

「どうかされましたか？日向様」

前を歩いていた執事風の男、ペローは後ろを振り返り日向に言った。

「いや、服装が制服のまんまでいいだなんて良かったなーって思ってた。びらびらのマントとか、変な洋風っぽいびらびらの服着せられたりしたらどうしようって思ってたから」

自分の姿を見ながら日向は言う。

日向の今の服装は、紺色のチェックズボンに上は白い半袖のカットシャツ。

シャツのボタンを一つ開け、その上から水色っぽいネクタイを少し緩めて首につけているという一般高校生夏服スタイルだ。

元の世界では8月の上旬、夏真っ盛りの猛暑日。夏休み中だと言うのに何故制服だったのか、

それはそんなに不思議ではない。日向の入っている部の活動が、その日その時間にたまたまあったからだ。

『絵本部』

それが日向が入っている部活動。その名の通り絵本を書く部活だ。日向は絵を書くのが好きだったので、高校に入ったら美術部に入ろうと思っていた。中学では訳あって入れなかったのが、高校では必ず入ってやるぞ！と言う意気込みのもと、新入生が入ってきたらど

この学校でも、必ずやるだろうと思われる上級生による、部活動勧誘イベントなどもろくに見ず、部活動希望シートに『美術部』と書いて、職員室にいる担任の先生に提出しにいったのだ。

そこからは、日向があればほど入りたかった美術部から、そんな部活があったのか！と言うほど影の薄い、弱小絵本部に変更した最大の理由になるのだが。

職員室についた日向は、さっそく担任に希望シートを渡すべく職員室の中を、キョロキョロとしながら担任の先生を探す。担任は意外とすぐに見つかった。

日向の担任は今どき珍しい金髪の若い男の先生で、教科は国語を担当している。

そんな担任の、クラスでの国語の授業中の出来事を、一つ紹介しておこう。

「なんでその頭で怒られないんですか？」とクラスの誰かが担任に聞いた。

先生が金髪だなんて非常識にもほどがある。

担任はよくぞ聞いてくれました！と、

涙ながらに金髪に関する自分の体験談を長々と聞かせてくれたのだ。

最初の方はちゃんと先生の話を聞いていたクラスの連中も、それが5分、10分ともなると流石に飽きてきたのか、机に頭をのせ、あきらかに寝る体勢に入る奴や、持ってきていた本

を読む奴、教科書をぱらぱらと捲る奴や、隣の席や後ろの席の奴と喋りはじめる奴が出てきてしまったのだ。

因みに日向は最後のやつに当てはまる。

流石にそこまで来ると先生もクラスの異変に気付いたようで、教壇を叩き皆の注目を集め、真面目な顔でこう言ったのだ。

『お前らは俺のように、熱く清らかなる心で金髪と言う愛しく、そして儚げなものに愛をそそぎたくはないのか!』と。

誰も言葉を発する者はいなかった。

クラス中がシンとし、静寂が教室を満たす中、先生は正規の国語の授業を再開したのだ。

あの時のクラスの連中の大半がこう思っていただろう。

『髪の色にそこまでの愛をそそぎたくない』と。

それでもそんな担任の先生が生徒から変な目で見られて嫌われないのは、明るく、性格もいいからだ。

生徒にも気さくに話しかけてきて、冗談なども軽く言うので付き合いやすい、どの生徒からも、そして先生からも評判が良かった。

そして、ここからが一番重要なのだが。

先生は顔がそこそ男前だったのである。

これがただの不細工なおっさんだったら許されなかっただろうが、顔がいいとは特なものだ。

どんな変な発言をしても軽く流してもらえるか、ちょっと変わって素敵、そのギャップが良い！なんて思われてしまうのだから。

まあ、金髪の件を除いたらすこぶるいい先生なのは確かだが。

話を元に戻そう。

無事職員室内で担任を見つけた日向は、先生に近付こうと足を動かした。

その瞬間、ものすごい怒鳴り声が横から聞こえてきて、思わず立ち止まる。

横を見るとそこには、2年生用の深緑色のネクタイを絞め、直立不動の姿勢で腕を後ろに組み、いわゆる自衛隊風立ち姿で立っている男と、同じく直立不動で深緑色のネクタイを絞めている、そこそこ顔の可愛い女の子が、ちよつとタイプいかつい顔の先生の前に、真剣な顔をして二人並んで立っていた。

「てめえら、解ってんのか？試合まであと1ヶ月きってんだぞ？こんな状態で他校の奴等に勝てると思ってるのかっ！」

いかつい顔の先生が二人に怒鳴りつける。二人は、「はいっ、勝てません！」と綺麗に揃えて答える。

「解ってんならもつと練習しやがれてんだよ。努力が足りてねーんだよ、努力がよお！お前らの中にはちゃんと努力って言葉は入ってんのか？部のために自分のために努力しようって気持ちはその頭の中に入ってるのか？ええ？」

二人の生徒は又もや揃えて、「はいっ、入ってます！」と答えた。日向はそんな光景を見ながら、凄いバリバリの体育会系だな、と顔をひきつらせる。するといつの間にか日向の目の前に来ていた金髪のクラス担任が日向に声をかける。

「すごいだろ？あそこの部活。顧問の先生がスパルタ中のスパルタなんだ。並みの神経じゃやっていけない部だって話しだからな」

いかつい顔の先生はまだ二人に怒鳴りつけている。

「……本当に凄いですね。どこの運動部なんですか？男女が一緒なんて」

とりあえず参考までに聞いておこうと担任に聞いたなら、耳元でひそひそと話してくれた。別に普通に喋ってもいいんじゃないか？

「運動部じゃないんだよ。あれは美術部」

日向はその言葉を聞いて固まる。

あれが美術部？だってさっき、試合とかなんとかって言ってませんでしたっけ？

「試合ってのはコンクールの事だ。春の美術コンクールがすぐそこまでせまってきてるもんだから、気が立っているんだと思う」

たかだか高校のコンクールで？しかも美術。

「春の美術コンクールは結構規模がでかいんだよ。この辺りの小学校、中学校、高校、それに大学も関わってきていて、その学校の全員に応募資格があるんだ。そこで入賞できるってことは物凄い事になるんだぞ」

聞いた事ないか？と聞かれるが、生憎日向は、この辺りに住み始めたのが最近だったので分からなかった。つい最近引っ越して来たばかりなのだ。

「でかいコンクールだからって部活動の絵にそこまでの気合いを入れるもんなんですか？部活って楽しくやるもんじゃ？」

「そこは野球部でもサッカー部でも同じで、誰かと競いあうってのは、文化部でも運動部でも変わらない。

コンクールでも試合でも、何も変わらないって事なんだよ。1番になりたいって気持ちは誰にでもあるって事だ。闘争心や競争心ってのは大事なんだぞ？人が成長していく上でかけがえのない物の一つだと先生は思ってるからな」

まあ、そうかも知れないけどさ、と思いながら日向は横目で怒鳴られていた二人を見る。

今はもう怒鳴られてはいなく、いかつい顔の先生に自分の描いた絵を見せ、どこが悪いのかを真剣に聞いている。いかつい顔の美術部顧問の先生も真剣に二人にアドバイスしている様だった。

暫くじつとその様子を見ていた日向に、担任は「ところで何か用事か？」と聞いてきた。

日向は、持っていた部活希望シートをそっと手の中に隠し、「何でもないです」と言って、そそくさと退散する。
職員室を出てから、手の中にあつた紙をポケットに無造作に突っ込み、歩きだす。

「……………」

日向は別に競争がしたいわけじゃない。自分の絵で1番になりたいとも思っていない。

ただ絵を書くのが好きなだけだ。暇な時にちょこつと書いている趣味程度の物で、特にうまいと言うわけでもない。だからあの美術部に入るのは何か違う気がした。だから担任に希望シートを出さなかった。

そんなわけで。

日向は中学から入ったかった美術部（高校では熱血美術部！）ではなく。

こんな部活があったのか、『影の薄い絵本部』に入る事となったのだ。

「因みにさ、ペローさん。俺はこれからダンスパーティーに行くんだよね？」

廊下をどんどん前に進んでいくペローに、日向はいかにも面倒な感じですけど、といった口調で話しかける。

ペローは歩みを止めず、ちらりと後ろを振り返ってからこれからの事を説明してくれた。

「これから日向様には、大勢の人々が集まっているダンスホールへ向かってもらいます。そこで魔女の魔法で着飾り、綺麗になったシンデレラを探しだしてもらい仲良く談笑し、音楽が流れ始めたらシンデレラを誘って一緒にダンスを踊り、いい雰囲気醸し出してもらいます。」

シンデレラは12時の鐘が鳴ったら慌てて走り出してしまうので、それを追いかけて、階段に残されているシンデレラが落としていったガラスの靴を拾って探して見つけて結婚して終了、ですね。オツケーですか？」

最後が物凄く適当極まりない説明をしてくれたペローは、足を止めて振り返り日向の方を向く。

「要は『シンデレラ』のお話ですから。日向様も知っているでしょう？シンデレラ。そのお話し通りに、ことを運んで頂ければいい

んですよ、王子役として」

ペローはそれだけ言うともた歩き始めた。日向もそれに続いて歩きます。

シンデレラの話しだって言われても・・・。

日向だってシンデレラぐらいは知っている。仮にも『絵本部』と言う部活に入っているぐらいなのだから、大抵の絵本は読んできた。

まあ絵本なんか読んでいなくても世界中のほとんどの人が知っているであろう、代表的物語なシンデレラ。

意地悪な母親と、これまた意地悪な姉達と一緒に十数年暮らしてきたシンデレラ。毎日毎日掃除や洗濯や買い物やらの、雑仕事ばかりを押し付けられいじめられ、自分の着ている服はボロボロになっていく。姉達の着ている様な綺麗な服をいつか着てみたい、そう日々夢を見て、頑張って生きてきた少女。お城の舞踏会の日も、母や姉達に家の仕事を押し付けられ、お城に行く事を許してもらえず、綺麗なドレスを着飾り楽しげに去っていく姉達を羨ましげに見送った。

シンデレラはベッドで一人寂しく泣いた。悔しくて、悲しくて、家の事をする気にもならなかった。そんな時に魔女に会うのだ。

後はペローが先程説明してくれた様に、魔女に魔法をかけてもらったシンデレラは、王子と出会い恋をして、末長く一緒に幸せに暮らすようになる、というお話だ。

女の子ならきつとこんな展開の話し、大好きなんだろうと思う。一度は夢みるお姫さまストーリーで、憧れてしまう展開なんだろう。

だが。

いかんせん、日向は男だ。一端の高校生男児だ。女の子ではない。なのでこんなお姫さま的話しにも、『王子』という単語にもあまり興味はない。むしろ『王子』なんていう単語に薄ら寒いものを感じてしまうほどだ。

絵本部に入った事により、多少の耐性は出来ているものの、自分が王子な立場になる事など絶対に嫌だったし、そんな展開万が一にも起こらないと思っていた。

あの時までは。

時を数時間前までに遡ってみよう。8月上旬、猛暑日、部活のある日。

制服を着て暑い中、家を出る。学校までは歩いて15分ぐらいだ。鞆を頭の上にかざして日除けにし、汗をだらだら流しながら、日向はえっちらおっちら歩いていった。

昨日やっと出来た、絵本に使う絵のラフ画。

他の部員が考えた話しに、日向の絵を使って作る今回の絵本は、この夏の部としての活動大作として学校に展示される事になっている。弱小絵本部としては初と言ってもいいほど大きなイベントであったため、皆気合いを入れていた。皆と言っても日向を入れて部員が3人と言う超弱小部なのだが。

そんな訳で日向は、作る絵本に合いそうな絵を色々書いてノートにまとめ、他の絵本部部員と相談するべく学校への道を歩いていたのだ。

その時に見つけてしまったのだ、あれを。こんな面倒な事に巻き込まれる原因となった物を。

地面に落ちていたのは鍵だった。金色で赤い石がついている、女の子が喜びそうな綺麗な鍵。

以前の日向なら、何もせずにそのまま通りすぎていただろう。だが、高校生になった日向は絵本部と言う部活に入る事により、少しだけだがそういった可愛らしい物にも目が行くようになっていたのだ。絵の参考にと手に取り、観察するようになっていたのだ。だからといって地面に落ちている物など普通は拾わない。拾わない筈なのだ。

だが日向はその時拾ってしまった。なぜだか無性に気になり、ひよっと拾い上げてしまったのだ。

そして今現在いる、ここ『王子のお城』に飛ばされてしまったのだ。

「時間よ戻れ」

何度そう願ったかわからない。鍵を拾う前の時間に戻ってくれ、と。

願いは叶わず、日向は王子としてシンデレラの話を進行していかなくてはならないはめになったのだ。

本来女の子に拾ってもらった鍵を、誤って日向が拾ってしまった事により、シンデレラとして話を進行してもらった予定が、『王子』として日向が進行していかなくては行けなくなってしまったと言う、なんとも悲しい展開に陥ってしまったのだ。

「自業自得ですよ。こちらも予想外の展開に色々変更箇所が増えて大変なんですからね」

執事ペローは、忙しくて大変だ大変だと言いながら歩くペースをまた少しあげ、階段を降りて行く。

それを追いかける日向。迷惑かけて、申し訳ないなーとは思っていますよ。本当に。

ペローは、今は執事の格好などをしているが、本来は物語の管理人という立場らしい。

物語の管理人とは、担当の物語に出てくる、登場人物達になりえる人をどこからか探しだし、

その人物を物語の中に連れて来て、ストーリーを最後まで進めても

らう。

そして物語が終わったら、管理人は連れてきた人の辿ったストーリーを回収し、その人の記憶を消して元の世界へと帰すのだ。

そしてまた新しい登場人物足り得る人を探しに行く。

その繰り返しだ。因みにペローの担当物語は、シンデレラや白雪姫などの女の子よりの物語だ。

なので連れて来るのは、ほぼ女の子。

「そんなに何回もこんな事してどーすんだよ？」

日向がそう聞いてみた所、物語の大まかなストーリーは同じだが、違う人物、違う考えの人が同じ役をやると、また違った物語におのずと行って行くのだそう。

シンデレラにも、

初めて物語の中に来たシンデレラはあんな感じになった、次に来たシンデレラはまた別の感じにストーリーが進んでいった。

それぞれがそれぞれのストーリーを描いて行く物語。まあ最後にはハッピーエンドで終わる様にはなっているのだが。

それを集めて収集する事が、物語の管理人としての仕事なんだ、とペローは薄く笑った。

簡単に言えば、いろんなシンデレラやいろんな白雪姫やいろんなかくや姫、などの話を集めてるって事らしい。

そんな仕事が存在したとは驚きだ。まさにファンタジー。でもなんでそれを集めているのかは企業秘密、だそう。

そして今回、シンデレラの話しに連れてこられたのが日向と言う、悲しいかな男だった。

思いもよらなかった自体に、急きょ役割をシンデレラから王子に変更したため、話しの中は物凄いごたごた状態らしい。主にペローのみが。

……本当に申し訳ない。いや、俺だけが悪いわけでもないと思うんだけどさ。

何となく申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまいう日向なのであった。

じゃあ、違う誰かをもう一回連れて来たらいいんじゃないのか。

とも思うのだが、それは無理らしい。

残念ですよ、本当。

階段を降りきり、前を歩いていったペローが立ち止まる。目の前には扉。追いついた日向もそこで止まる。

「この先がダンスホールです。シンデレラはもう来ている筈ですので中をお探し下さい。後は先程ご説明した通りの手順で。

私はまだ色々とやる必要がありますので、ここまでしか一緒に出来ませんが、日向様」

ペローはにっこりと微笑む。

「ごゆるりとシンデレラ物語の中の世界をお楽しみ下さいませ」

目の前の扉がペローの手により開かれる。

日向は覚悟を決め、ネクタイをきちんと絞める。

扉が開かれ、

目の前に広がった景色は眩しくて、思わず目を逸らしてしまうほどの、綺麗でぴかぴかした大きな大きなダンスホールだった。

日向の『シンデレラ物語』が今ここに、始まった。

シンデレラ2

『シンデレラは魔法の魔法で綺麗なドレスを着ることができ、とても喜んだ。だが、お城まで行くための手段がない。魔法は微笑み、カボチャを馬車にネズミを馬と業者に変え、シンデレラに与えた。魔法の魔法に驚き目を見張りながらもシンデレラは魔法に促され、カボチャの馬車に揺られうきうきしながらお城へと向かう』

カボチャの馬車の中でシンデレラは何を考えていたのだろうか。これから行く初めてのお城に胸を馳せ、魔法により着ることのできた憧れの綺麗なドレスや靴を、何度も眺めては目をキラキラさせ、顔はきつと緩みっぱなしだったに違いない。

先にお城へ行っている母親や姉達が自分の、いつもとは違う見違える様な綺麗な姿を見たらきつと腰を抜かすほど驚くに違いないと、少し出し抜いた思いで嬉しくなりつつ、満面の笑みを浮かべながらカボチャの馬車に、ゆったりカタコトと揺られながら進んでいく。

嬉しくて、わくわくして、笑顔になって。心が踊って、ドキドキして、緊張して。

そしてこれから行く王子のいるお城でのパーティーが、楽しみで。

そんな気持ちでシンデレラは、カボチャの馬車に乗っていたのかも

しれない。

日向紘は今ダンスホールの中にいた。色とりどりのキラキラしたドレスを身に纏い、綺麗に着飾った女の子や女の人、女の方などが大勢いるダンスホールを一人歩いている。

途中、ドレスをヒラヒラさせながら走り回る女の子に、無邪気な笑顔を向けられ、ワイングラスを両手に持った、胸を物凄く強調させたような赤いドレスを着た女の人に迫られ、お母さん世代の方達に、『うちの娘と一緒に話しても』や、『うちの娘は優しく気立てがよくて一番可愛い女の子なんですっ』や、『王子のタイプはどんな女性なのですか』などいろいろ言われ、逃げる様に人と人との間をぬって歩いていた日向は、未だシンデレラを見つけられずにいた。

足を止め、壁に掛けられている巨大な柱時計を仰ぎ見る。ちくたくちくたくと、大きい割には可愛らしい音をたてている柱時計の時刻は、午後11時15分。

日向がダンスホールに入ったのが午後10時ぐらいだったので、もう1時間以上もたってしまったている。日向はため息をつきながら隅の方の壁に寄り、もたれ掛かって広いホールを見渡す。

シンデレラなどすぐに見つかると思っていた。絵本のお話しの中で

は、王子はとびきり綺麗なシンデレラという女性に目を奪われ、ダンスに誘う。日向もそんなお話しのように、シンデレラを見つけたらすぐにそれだと分かるだろうと鷹をくくっていた。もしかしたら向こうから近付いて来てくれるかもしれないと少しばかりの期待をも抱いていたのだ。だが、その甘い考えがそもそもの間違いだった。

ペローが開けてくれた扉から、日向がダンスホールに入った時、真っ先に驚いたのはその広さと人の多さだった。

奥にいるだろう人が小さく見える程のただっぴろいホールに、大きな丸いテーブルが等間隔で何個も置かれている。その上には美味しそうなパンや、肉や野菜の料理が所狭しと皿に乗せられ置いてあり、テーブルの周りには何十人も女の人や男の人が、楽しそうに談笑している。

天井には、落ちてきたら確実に何人もの死傷者が出るだろう巨大なシャンデリアがあり、広いホールにキラキラと、眩しい光をいっぱいに落としていた。黒い服を着たウェイターっぽい人が、丸いおぼんに飲み物を乗せ、器用に人を避けながら歩いていたりする。

日向はあまりのパーティーの規模のでかさに、声も出ず口をぽかんとあけてその場に立ちすくんでしまっていた。そんな日向を扉近くにいた何人もの人達が、好奇の目でじっと見ているのに気付き、しらず顔が熱くなるのを感じた日向は思わず下を向いてしまう。

「もしかして、王子様ですか？」

問われた質問に日向が顔を上げ、はいと答えた瞬間、周りになんだ

か微妙な空気が流れた。何なんだと思っていると、微かに『小さくない？』や『まだこんなに幼かったっけ？』など口々に日向の外見に関する厳しいお声が聞こえてくる。

確かに日向はまだ高校1年生でぴちぴちの16歳だ。身長も165cmと普通で、顔も当たり前だがまだ大人になりきれていない。本来の『シンデレラ』の設定であれば王子はきっと成人している、もしくは成人間近の男性設定の筈だ。だからまだ16歳の日向がそんな風に言われるのはしょうがない事だとは思うけど、やっぱりかなりへこんでしまう日向なのだった。

微妙な空気に耐えられず、日向はホールを奥へと進む。すれ違う人々に見られはするが奥へ奥へと進むうち、そんな好奇の目も薄らいで行く。安心した日向が足を止めて近くのテーブルに近寄ると、上に乗っている料理のあまりの豪勢さと美味しそうな匂いに目を奪われてしまった。日向は歩いて来た時に目についた巨大な柱時計を見る。時刻は午後10時ちょっと過ぎ。シンデレラが帰るのが12時なので、ダンスの時間を入れてもまだまだ充分時間はある。日向は、ちよっとぐらいなら大丈夫だよなあと自分に言い聞かせ、置いてあった取り皿を取って滅多に食べられない豪勢かつゴージャスな料理に手を伸ばしたのだった。

そして気が付けば30分程もたっていた。各テーブルに違う種類の料理が置いてあったため、どんどん目移りしていつてしまったり、普通の一般市民なら見られないであろう置物や綺麗に着飾った人々、先程はちゃんと見えていなかった物が目に入ってきて、残念ながら日向は時間の感覚が狂ってしまったのだ。少しだけのつもりが、

がつつり楽しんでしまっていたらしい。

時刻は午後10時40分少し前。聞いた話しによるとダンスは午後11時30分から始まるらしいので、後50分ぐらいしかなかった。このただっぴろいホールの中を顔も分かっていない女性を探すのに50分で足りるだろうか。少し不安になる日向だったが、まあ大丈夫だろうとこの時は呑気に考えていた。

その結果が午後11時15分、ダンスが始まるまで後15分をきってしまったのに未だシンデレラを見つけれないと言う最悪の事態を引き起こしてしまったのだ。

「・・・・・・はあ」

自分の浅はかさを呪った。日向は、盛大なため息をつく。

もし日向がシンデレラを見つけれなかった場合どうなるのだろうか。12時になったらシンデレラは帰ってしまう。それまでに会えなければ王子との恋もなければダンスもない、慌てて帰る事もないのでガラスの靴を落として行く事もないのではないだろうか。話しは進行しなくなって、ハッピーエンドで終わる事もなく、結果・・・

どうなるのだろうか・・・？

壁に凭れながらぼけっとしていると、後ろからスパンツ！と頭を殴られる。軽い衝撃にびっくりして後ろの壁を振り返って見ると、壁の中からは日向の頭を殴ったのであろう手首が、手首だけがうにうにと動きながら壁から突き出ていた。

「……っ！！」

ホラーすぎる絵面に必死に悲鳴を飲み込み、じりじりと後退りながらも、気持ち悪いそれから目を反らせずに凝視していると、壁からはだんだんと手首から腕、頭、肩、足などが出てきて最終的に一人の人間が壁の中から現れた。その人間は日向の方を睨み付け、尊大な態度で眉間に皺を寄せながら立っていた。その執事服を着た姿には見覚えがあった。

「……ペロー」

日向の頭を叩き壁の中から出てきたのは、執事の服に身を包んだ『物語の管理人』、ペローだった。

「何悠長に壁の華なんてやってるんですか、日向様」

イライラとした態度を隠そうともせず、ペローは日向と向かい合い、冷たい声で言い放つ。

「えー・・・と、壁から出てくるなんてお前、お化けみたいだな」

「私はこの物語の管理人です」

「壁から人間が出てきたら皆驚くんじゃないか？」

「私は管理人なので、なんでもありません。ですから他の人達からは気にもされません」

「印象が薄いつてことか？」

「そうですね」

「なにかと便利そーだな」

「そうですね」

「・・・機嫌悪い？」

「そうですね」

「・・・」

会話終了。

そんなこんなで。

日向は未だシンデレラを見つけられていない現状をペローに申し訳

なさそうに話すのだった。

只今の時刻、午後11時25分。ダンスが始まるまで残り5分。タイムリミットは迫っていた。王子である日向は現在、ダンスホールから出てすぐ近くにあるこじんまりとした庭に来ていた。何故ならばシンデレラが庭にいますと言う情報とある人物から聞いたからだ。とある人物とは言わずと知れたこの物語の管理人、ペローその人である。

「シンデレラは今、ここから近くの庭で休憩されております」

ペローは日向の話を聞いた後、ため息をついてそう言った。なんでもそんな事知ってたんだと日向が聞くと、疲れた様な顔をしながらペローは、誰かさんのせいで変更箇所が多く、色々走り回っていたのでと日向を責める様な言い方をした。嫌みな奴。

「じゃあ庭の方に行ってみるわ」

ありがとーと言ってペローに手を振り歩き出した日向の後ろから、絶対に落として下さいねーとペローが叫んだ。幸いその叫びを気にする人はいなかった。ペロー自身が言っていたように物語の管理人

というのは周りの人物からは気にされない、というのは本当らしい。日向はペローが連れてきた異世界の人間なので、この世界の理には当てはまらないらしいのだが。

それにしても、シンデレラが庭にいるとはどういう事か。シンデレラにとつてお城なんて憧れそのものの筈だろう。いつも家の手伝いや仕事ばかりで、大変だったシンデレラ。そんなシンデレラがお城のパーティーに来て、はしゃがない筈がない。日向だって豪勢な食事とあまりにも大勢な人々に興奮して、時間を忘れて楽しんでしまったぐらいなのだから。

庭に出た日向は、今度こそちゃんとシンデレラを見つけるぞーと意気込みを高くしたがその意気込みは無駄に終わってしまうことになる。

シンデレラらしき人物はすぐに見つかったからだ。ベンチにすわり背凭れにもたれて空を仰いでいる少女。着ているドレスは白銀で、お城の中から漏れでてくる光にキラキラと輝きながら少女を美しく引き立たせている。この物語に欠かせないガラスの靴もちゃんと履いていた。だが、まだ確証はなかったのでとりあえず日向は声をかけて見ることにした。

「あの、あなたがシンデレラですか？」

少女は夜空に向けていた視線をこちらに向けた。その綺麗な青色の透き通る様な瞳に、日向は一瞬ドキリとするが次の瞬間、それは脆くも崩れさる。

「うせろ」

・・・今回のシンデレラはなかなか口が悪うございました。
と、諦めてしまう事は日向には許されていない。だが初対面の、しかも同年ぐらいの女の子に声をかけただけで『うせろ』だなどと言われてしまったら、思春期真っ只中の高校1年の日向の心が深く傷付いてしまうのは仕方がない。

もともと日向はそこそこの女の子にモテてきた男だ。付き合った事などはないが、告白された事は今まで何回もあった。女の子がよくやる『クラスの中で誰がかっこいいかランキング』なるものでも上位に食い込んでいた事もある。

「・・・」

うせろとだけ言った少女は、また先程と同じ様に空に視線を向ける。確かにここから見える夜空にはたくさんの星が散らばっており、吸い込まれそうな程幻想的でもあった。日向も少しだけぼんやり見上げた後、とりあえず少女の隣に座る。少女は気にする風でもなく微動だにしないまま目を細め空を見上げたままだった。

「あの、君がシンデレラだね？」

日向がめげずに話しかけるも、少女は無言のままだった。あまり話しかけすぎて、また『うせろ』とか言われるのも嫌なのだがこのままだと時間がヤバイ。

焦る日向を尻目に少女はのんびり空を見上げたまま面倒そうに呟いた。

「私に何か用？」

そんな少女に日向はどうすればいいのか、とっさには浮かばなかった。とりあえずお話しをしようと思ってと言ったら何故？と問いかえされてしまった。

何故って……

そうこうしているうちに、城の中から音楽が聞こえ始めた。ダンスタイムが始まってしまった様だ。お城の中では男女ペアになって踊っている人や、一人で優雅に踊っている人、女性をダンスに誘い、振られ悲しそうに歩いている人など様々な人達が広いダンスホールを歩き交っている。子供達も楽しそうにくるくると回りながら人にぶつかったりテーブルにぶつかったりとせわしない。

「ダンス、始まったけど」

いつの間にか空から目線を下げ欠伸をしていた少女、シンデレラにそれとなく話しかける。

「そーだね」

「行かないのか？」

「興味ないし」

興味がないと言われてしまった。なんなんだこのシンデレラは。次の言葉が出ない日向を見る事もせず、シンデレラはベンチから立ち上がり歩いて行こうとした。

日向はシンデレラとまだろくに話もしていない。ダンスに誘う事もできていない。避けられている、というよりは日向に全く興味がないのだろう。

このまま行かせては本当にダンスにまで持ち込めないし、物語をちゃんとストーリー通り進める事もできない。日向はシンデレラの腕を掴み引き止める。

「一目惚れしたんで、一緒にダンスを踊りませんかっ!!」

恥を忍んでやけくその様に叫んだ日向に、シンデレラは物凄く不愉快そうな視線を向けた。

「嫌」

それだけ言って日向の手を振り払い日向に背を向け、また歩き初めた。

「・・・・・・・・・・」

日向の顔がひくりとひきつる。勇気を出してダンスに誘ったのに『嫌』の一言で断られ、そのまま置いていかれた。あんな奴がシンデレラ？想像していた女の子とは全然違ったシンデレラに日向は怒りを感じてしまう。

「ちょっと待てよっ！」

日向は叫んで走り出した。シンデレラもそんな日向に気付いてか、歩みを止め振り向く。二人はまた向き合った。

「まだ何か用？」

「あのなあ、一応俺はこの城の王子だぞ。シンデレラならときめき対象に入る所だろ？なんで断られなきゃいけないんだよ」

我慢の限界に来ていた日向は一気に捲し立てる。

「それにお前お城に来たくて魔女に魔法でドレスやら靴やら馬車やら出して貰ったんだろ？なんで楽しんでないんだよ、なんで庭にいないだよ。可笑しいだろ？この物語ってシンデレラだろ？ちゃんと決められた役通り行動しろよ！」

一気に捲し立てて疲れたのか、肩を上下させながら睨んでくる日向を、冷めた目でシンデレラは見る。

「別に来たくて来たわけじゃない。それになんであんたが魔女や魔法の事知ってるの？もしかしてあれはあんたの差し金？ドレスやら靴やら人に無理矢理押し付けておいて、しかも変な馬車にまで乗せられてこんな所まで連れて来ておいて。本当に迷惑にも程があるわ。」

それだけ言ってシンデレラは日向に背を向け、また歩いていった。しまった。

「……日向様」

後ろからペローの声がした。

「どういう事が説明してくれるな？」

後ろを振り向かずに、日向はつとめて冷静な口調を出すよう心がけながらペローに言った。

シンデレラ3

「そもそもは日向様が悪いんですよ?」

ペローの顔は『俺は悪くないですよ』とでもいいかげな顔だった。
なんてふてぶてしい。

本来はシンデレラ役の女の子が拾うはずだった物を、日向が過って拾ってしまった。だから日向は今ここにいます。

「俺だって悪いと思ったから、こうやって王子役なんて寒い役、やってやってんじゃないか」

王子なんてガラじゃない。俺は一般人なんだから。

「自業自得だからそれは我慢する。だがっ!あのシンデレラはなんじゃないか!!」

いきり立つ日向を、ペローはまあまあと宥める。

「急ぎの変更だったの、あの様な少女になりましたが一応シンデレラですから。おとして下さい」

にっこり笑顔のペローを見ながら、あの時の言葉はこう言う意味だったのかと今更ながらに察する。

『絶対におとして下さいねー』

おとすのが難しいだろう事を知ってのセリフだ。
憎らしい……。

「あの女、無理矢理押し付けられたーとか言ってたけど、本当なのか？」

「……まあ、なんと云いますか……本当ですね」

シンデレラに魔法をかけた魔女役はペローがしたらしい。普段は『役』としては出ないようにしているらしいのだが、今回は緊急事態だ。

仕方がなかったらしい。

そんなペローいわく……。

シンデレラとした少女は綺麗な服や豪華な物などには全くと言っていいほど興味がなかったらしい。

母親や姉達に虐められてはいるが、それも良い人生経験だし逆に洗濯や料理や掃除など、いろいろ覚えられて得だと思っているような女の子、なのだ。

「なので、魔女役な私が無理矢理連れてきました」

大変でしたよー。なんて言ってるが、そもそもなんでそんな女をシ

ンデレラにしたんだよ？

「時間がなくて」

この男は全部その言葉で済ませるつもりだろうか。『時間がなくて』
『変更が多くて』？

はぁ・・・と日向はため息をつく。

只今の時間、午後11時45分。シンデレラの魔法が切れるタイム
リミットまで、後15分。

その間になんとしてでも日向を好きにならせて、ダンスをしなければ
ならない。

できるだろうか？

もんもんと考えこんでいた日向にペローは、「大変ですよ、日向様
と少し焦ったような声で話しかける。

「どーしたんだ？」

「シンデレラが帰ろうとしているみたいです」

なんですと！？

「ちょーおと待ったあーあ!!」

お城の外階段を歩いていたらシンデレラにストップをかける。
なんとか間に合ったようだ。

「……何？まだ何かようなわけ？」

振り向くシンデレラの顔は物凄く嫌そうな顔だった。
まじでストーカーかよ、とか思われてたらどうしよう。

「なんで帰ろうとしてんだよ」

「もうすぐ12時だし。魔法がきれる15分前行動」

「……偉いな」

「ありがとう」

って、そうじゃなく！

「まだダンス踊ってないだろ？そんなんで帰っていいのか？」

「お城の料理は食べたし。私がやりたかった事はした。それに12
時まではいってくれて言う魔女との約束は守ったし」

そうですかー。

料理が食いたかっただけですかー。自分の料理の探究のためだろうか。それとも本当に食べたかっただけか？

「15分前に帰ってたら約束守った事にはならないんじゃないのか？」

「魔法がきれるのは12時ちょうど。何事も事前行動が基本でしょ？」

偉すぎる。

どんだけ優等生なんだこの女は。

今度は日向が呆れた顔をする番だったが、頭を振って気持ちを切り替える。

よし、と自分に気合いをいれてシンデレラを見る。

「まだ帰るなよ。俺とダンスを踊ってくれ」

日向はシンデレラに手を差し伸べる。

「・・・なんで？」

シンデレラは日向をじっと見る。青い瞳が真っ直ぐに日向の黒い目とぶつかる。

「一目惚れしたからだよ。さっきも言ったと思うけど」

嘘だけど。

可愛い子だなーとは確かに思うが惚れてはいない。しょせん物語の中の人物だ。好きになっても仕方がない。

それに日向はどちらかと言えば歳上が好みなのだ！

「一目惚れ、だなんて物凄く嘘臭いんだけど」

シンデレラは鋭く突っ込む。母親や姉達のせいで、とてもいい性格に成長しているようだ。

騙されてくれれば、丸くおさまるのに・・・！

「まあいいからいいから。踊ろうぜ」

日向は成功法で行くのを諦め、なかば強引にシンデレラの手を握る。好きだ惚れたと言ってもこのシンデレラには通用しないだろう。

だったら・・・

「ちょ、ちょっと危ない！」

階段をかけ上る日向に手を引かれる様にして、シンデレラも階段を上る。

履きなれない靴と着なれない服とで転けそうになるが、なんとか階段上の少し開けた場所まで無事に辿り着く。

「なんなのよ、いったい」

「中まで戻ってたら踊る時間なさそうだし、ここでいいかな、いいよな」

一人ぶつぶつと呟く日向に、シンデレラは顔を向ける。日向はそんなシンデレラに笑顔を向け、両手を握り、くるくると廻った。

文字通り、くるくると。

「・・・何？これ」

「ダンス」

「ダンスって。手を繋いでくるくる廻ってるだけじゃない！これはダンスとは言わないわ！」

周りからみたら何廻ってんだ？とか、バカか？とか目回らないのかな？とかどこの子供だ？とか思われるに違いない。

幸い周りに人影はなかったのでその心配はいらなかったが。

「・・・楽しいの、これ・・・？」

「俺だってやりたくてやってんじゃねーよ。しょうがなくてだ」

開き直った日向は強かった。しょせん物語、しょせん絵本の世界、だ。知り合いもいないから見られる心配もなし！終わったら記憶を消されるから、羞恥に苦しむ心配もなし！
今だけ頑張れ、乗り越えるんだ・・・！！

「はい、修了了」

何分かくると二人で廻った後、日向はシンデレラの手を離した。

「・・・」

「楽しかったか？」

「楽しいわけじゃない。慣れない靴でくるくると廻らされて足が痛いわよ」

「そーかそーか」

日向は笑顔を顔に張り付けたまま、シンデレラの目の前に手を伸ばす。

シンデレラはその日向の手をじっと見る。

「何？まだ廻るわけ？」

「違う違う。足、痛いんだろ？靴、履いてるの辛いんだろ？脱いだ方がいいよ。俺が預かっておくし」

ちよーだい、と日向は暗にシンデレラに言っているのだ。シンデレラは青い目を細め、日向を睨む。

「もしかして、最初から靴が目的だったわけ？」

「違うって。辛そうだからって言う俺の優しさだろ？男の好意は素直に受けるもんだぜ？」

そう言って日向は強引にシンデレラからガラスの靴を剥ぎ取る。

「ちょっと!？」

「代わりに俺の靴履いていけばいいし、はい」

自分の履いていたコンバースのスニーカーを脱いで地面に置く。

シンデレラが尚も日向に何か言おうとするのを遮るかの様に、城の中から大きな音がした。

ゴォーン、ゴォーン、ゴォーン。

「嘘っ、もしかして12時なの!？」

「みたいだなー。早く帰った方がいいぞ？」

手にガラスの靴を両足持った日向は、シンデレラに向かって手を振る。

「靴、返さないよ!」

「後でちゃんと返すって」

「信用できるわけないでしょ!？」

掴みかかってきそうなぐらいに叫ぶシンデレラに日向は、「じ・か・ん」とはっきりゆっくり言い聞かせる様にして言う。

シンデレラは悔しそうにしながらも、諦めたのか日向に背をむけ階段をもうスピードで降りだした。
裸足で。

「俺の靴、履いていけば良かったのに」

そのままになっていた自分の靴を履きなおし、手に掴んでいた物を見る。

「なんとかガラスの靴、ゲットだな」

シンデレラ4

「最低ですね」

ガラスの靴を持って、ペローに、

「ガラスの靴、ゲットだぜっ！」と腕を振り上げたらしう言われた。日向の悪行を見ていたらしい。

「仕方ないだろ？ああでもしないと、ダンスも踊ってくれなかったし、このガラスの靴だって置いてってくれなかったかもしれないんだぞ？」

目の前の台座に置いてあるガラスの靴を指差した。日向の戦利品だ。

「無理矢理じゃないですか。ロマンチックも何もない」

「無理矢理とか…お前に言われたくないし」

最初にシンデレラを、無理矢理お城に連れてきたのはどこのどいつだよ。

「それはもともと、あなたが」

「あー！はいはいっ。俺が悪いって言うんだろ？耳タコだ」

ペローの言葉を遮り、日向は耳をふさぐ。責められるのも聞きあきた。

「……とにかく、後はシンデレラを捜しだして、結婚まで持ち込んで頂けたらハッピーエンドを迎える事ができます。もう少しなので

頑張ってくださいね」

ペローに言われずとも解ってはいる。
が、そこが問題だった。

見つけるのは容易いだろう。顔も知っているし声も間近で聞いた。
今度こそ、見たらすぐにシンデレラだとわかるだろう。

だが！

あの少女が日向と結婚してくれるか、となるとそこは難しいだろう。

いや、確実に『ない』。

「はあー………」

日向は盛大なため息をつく。次会う時までに対策を練らないといけない。だが悠長に考えている暇を、日向は許されていなかった。

「では、行きますよ。日向様」

「は？」

「『は？』ではありません。シンデレラを捜しに行きますよ」

ついさっきパーティーが終わった所なのに、何言っただ？と言う
目でペローを見る日向に、ペローは外を指差す。

先程まで満天の星がきらきらと瞬いていた夜の景色が一変、
外は太陽の光が眩しい、鳥がチュンチュンと鳴いている朝の景色へと
早変わりしていた。

「……………」

「時間は割愛しました」

さすが物語の中の世界。
休む暇なし。

城から外に出て城下町。日向とペローとあと数人のめし使い、そして護衛の兵士。

『王子様御一行』のお通りだ。

「ペロー、俺思っただけどさあ……」

「何ですか？」

「自分で探した方が早い」

通算56人目。

ガラスの靴にぴったり合う女性はまだ見つからない。並ぶ行列も全然減らない。むしろ人がどんどん増えて、収拾がつかなくなっている始末だ。

「ていうか、なんで小さい子供やおばちゃんやらが混じってるんだ？」

行列に並ぶ人々を見ながら日向はペローに尋ねる。

「皆、王子のお嫁さんになりたいんですよ。良かったですね、モテて」

「微妙なんだけど。それ」

町に『王子様御一行』が着いた時には、すでに町中は大騒ぎになっていた。

王子がガラスの靴にぴったり合う女性を妃にする、という伝令を城が情報屋に流したらしい。

『靴に合う女性の足求む！』

などという看板が町のあちこちに立てられ、それを見た女性達が色めきだち、我先にと町に着いたばかりの王子御一行に突撃してきたのだ。

あまりの人の多さに整理券など配っている暇もなく、町の入口近くで『ガラスの靴合わせ』が始まってしまったのだ。

「女って、こえー……」

「王子の妃になったら一気にお金持ち。楽、しほうだい、金、使いたいほうだい、ダラダラしほうだいですからねー。皆なりたがるに決まってるじゃないですか」

減る様子のない群衆を見ながら、笑顔という名の仮面をつけたペロ―が隣で呟く。

「もうちょっと、オブラートに包めないのか？ ロマンチックはどう

した。金とか楽とか、即物的な。仮にも管理人だろ？シンデレラの物語の」

「管理人は管理人。物語の中の住人じゃないんです。上司に怒られ、仕事に追われるサラリーマンなんですよ。お金が欲しい今日この頃、なんですよ」

「……………そーか」

「そうです。実は転職とかも考えてます」

そんな会話をしつつ、日向は、あの女、来てないんだろうなーと他人事の様に思っていた。

そんなわけで。

ペローに「探してくるわ」とだけ言ってその場を離れた日向は、本物のシンデレラを捜しに町を散策するのであった。

町は『靴合わせ』のせいで、ほとんどぬけの殻になっていた。
泥棒さん入りたい放題な現状に、いいのかこれだと思いつつ、日向はシンデレラの家を探した。

「あのー、この辺りにシンデレラって女の子、住んでませんか？」

ようやく見つけた、『靴合わせ』に興味なさそうな30代男性に日向は尋ねる。

「シンデレラ？シンデレラってお向かいに住んでるシンデレラちゃんのことか？」

多分、そのシンデレラちゃんの事だと。

「あの子はいい子だよなあ。家の手伝いもちゃんとしてて。あれはいい嫁さんになるぜー」

うんうんと一人頷くおじさん。「俺の所に嫁に来てくれー」と叫んでいる。

「それであの、そのお宅はどこに？」

「ああ、この道を真っ直ぐ行って曲がり角で左に曲がった所の青い家の……」

おじさんがいい終わる前に、その曲がり角から一人の少女が出てきた。手には買い物かごをもっている。

「ナイスタイミング！シンデレラちゃん、お客さんだよー」

おじさんが少女に叫ぶ。

少女はそれに気付き小走りで近寄ってくるが、日向に気付くと誰も
がわかるような、嫌そうな顔をした。

「げっ」

「よう。何時間かぶり」

「この子、シンデレラちゃんに用があるみたいだよー。
もしかして、これ？」

おじさんは、にやにやしながら親指を立てる。

「違いますっ！なんで私がこんな盗人」

「盗人？」

「預かったただけだろー？人聞きの悪い」

ちゃんと返しにきたぞ。

「もういらないわよ！あんな物」

「それは困る」

「あんたが困ろうと、こっちは知ったこっちゃないわ。いらな
いたらいらない！」

意固地になるシンデレラに、日向はどうしたものかとため息をつく。

「何？何を返しにきたんだい？」

暫くその様子を見ていたおじさんが、日向に訊ねる。

「ガラスの靴です。シンデレラが魔女にもらっ」

「ああー！ー！！」

遮るようにしてシンデレラが叫ぶ。

「何だよ」

「やめてよね。一生の恥じだから」

おじさんに聞かれないように、シンデレラは日向にこそつと言う。

「私があんなビラビラな服着てお城のパーティーに行っただなんて、恥ずかしすぎる。馬鹿すぎる。アホすぎるー」

どんだけー。

ペローの奴、よく連れて来れたな。こんな女。

「もしかしてガラスの靴って、朝から皆が騒いでる、あのガラスの靴のことかい？」

シンデレラがきょとん、とする。

「騒いでるって、何かあったの？そーいえば町がやけに静かだし。朝っぱらから姉様達も慌てて出掛けたけど」

朝は弱い方なのに。

そんなシンデレラに、おじさんはびっくりする。

「シンデレラちゃん、女の子なんだから、もうちょっとそういう事に敏感になった方がいいよ。おじさん、心配」

「だから何なんですか？お祭りでもやってるんですか？」

日向はそのままおじさんに説明を任せ、状況を観察する事にした。

「入口近くで、『靴合わせ』がやってるんだよ」

「靴合わせ？」

「お城の王子の後捜しなんだって。それに町中の人達がこぞって我先にと行ってるんだよ」

シンデレラは興味なさげに、「へー、そうなんだ」と言っている。

「その靴っていうのが、『ガラスの靴』なんだよ」

「へー……って、はあ!？」

いい驚きぶりだ。

そろそろ会話に混じろうか。

「迎えに来たぞ、シンデレラ」

日向は笑顔を顔に張り付けて、シンデレラに手を伸ばす。
おじさんは、「やっぱりそうなんだねー」と嬉しそうだ。

「ちょ、ちょっと」

「捜していたのはお前だ、シンデレラ。俺の後になって欲しい」

ぱくぱくと口を開け閉めするシンデレラの腕を掴み、日向は自分に引き寄せ、抱きしめる。

「……!」

「好きだ。俺と一緒にしてくれないか？」

おじさんが「おお！」と叫ぶ。
なんだその、いい所きたー！な顔は。

「……い」

「い？」

「いやだあー！！！！」

どかっと、

シンデレラの蹴りが急所に決まる。

「……！！！！」

……………。

「そんなもの、嫌に決まってんでしょ！だ、誰があんたなんかとっ」

真っ赤になって叫ぶシンデレラの言葉は日向の耳には入らない。

「シンデレラちゃん、今のはちょっと……」

「何っ、おじさんもこいつの味方なわけ！？」

「いや、味方というかなんというか……」

おじさんはうずくまっている日向に、憐れみの目を向ける。

「とにかく、私は嫌！死んでも嫌っ！こいつの嫁になるぐらいなら死ぬ！死ぬわ！死んでやる！おじさんは私に死んで欲しいの！？」

おじさんに突っ掛かっていくシンデレラに、
それを、あたふたして対応するおじさん。
そして、急所を蹴られうずくまっている日向。

収拾がつかなくなってきました。

シンデレラ5

「何の騒ぎですか」

収拾がつかなくなった場所に、

救世主、現る。

というか、
ペロー現る。

「……………」

「日向さまー、何遊んでるんですかー」

「……………」

「おい」

「……………」

「大丈夫ですかー」

「……………」

……………。

どかっと、

ペローの蹴りが、うずくまっていた日向の腹に入る。

「ぐはあっ」

「無視しないで下さいよー。傷ついちゃうじゃないですかー」

「……俺の方が傷つけられてる」

……泣きそう。

「で、何があったんですか？」

まだ、わいやわいやしているシンデレラとおじさんを見ながら、ペローは日向に訊ねる。

「あの女、俺とは死んでも結婚なんぞしたくないんだと。俺と一緒にいるぐらいなら、死んだ方がましなんだとよ」

おまけに、

俺の大事な所をおもいつき蹴りやがって。

「百年の恋も一気に冷めた」

「百年も恋してないじゃないですか」

正確に言うなら、
恋もしていない。

「ああー！あんたー！！」

おじさんと、わいやわいやしていたシンデレラがこちらに気付く。

「あんた達、やっぱりぐるなんじゃない！よくも騙してくれたわね、魔女とかなんとか言ってくれちゃって。嘘つき！」

「嘘つきとは人聞きの悪い。騙してもいませんよ。私は」

「ちょっと待て、お前また全部俺のせいにしてないか？」

「してないです、してないです」

シンデレラから解放されたおじさんは一息つく。

「騙されたのよ、私はっ。騙された！結婚詐欺だわっ！」

「結婚詐欺って。まだ結婚もしてねーし」

「日向さまー、詐欺は駄目ですよ。詐欺は」

「お前、やっぱり全部俺のせいにしてるだろ」

救世主として現れたはずのペローが、全く救いになっていない。

おじさんはため息をつく。

「慰謝料よ、慰謝料はちゃんと請求させてもらうからねっ！」

「はぁ？何でそんなもん払わないといけないんだよ」

「当たり前でしょー！」

私は深く傷ついたのよ！」

「俺の方が傷ついたってーの」

「あんたが傷ついたとか、私には関係ないわっ！」

「はぁ！？何だその自己中発言。最低な女だな、何でこんな女がシ

ンデレラなんだよっ！」

「それは、日向様が」

「解ってるつつってんだろ！何度も言わせんな！」

じゃあ聞かないで下さいよ。

なんだか、すごいぐちゃぐちゃだなあとおじさんは思った。
ちよっと関わりたくないな、とも。

だが、シンデレラちゃんのためだ。

ここは俺がなんとか、

この場をおさめよう。

おじさんは決意を固める。

「シンデレラちゃん、とりあえずちよっと落ち着こう」

「私は落ち着いてるわ！」

全然落ち着いてないよ。

「！」がついてるし。

「シンデレラちゃんはこの二人に騙されたんだろう？」

「騙してないですよ、私は」

「はいはい、俺のせいですよ。全部俺が悪いんですよ」

その二人は黙ってる。とおじさんはギロリと睨む。

「おじさん、シンデレラちゃんが可哀想で仕方がないよ」

「おじさん…」

「女の子を騙すだなんて、男の風上にもおけない奴らだよなっと思う。慰謝料もたんまり貰えばいいよ」

シンデレラはうるうると目を潤ませる。

「慰謝料、払ってくれるよな？そちらの方々」

「は？何で俺がそん」

「解りました。お支払いしましょう」

日向を遮ってペローが言う。

おじさんは、「うん」と頷く。

「シンデレラちゃん、それで良いね？」

「おじさん、ありがとうございます」

シンデレラはおじさんに微笑みかける。

「いってことよ。じゃあ慰謝料貰いにお城に行ってきたな」

「うん！」

「じゃあ、後はよろしくお願いしますよ」

おじさんはペローに視線を送る。

「はい。ありがとうございます」

ペローもおじさんに視線を送る。

どういうことだ？

「つまりはこういう事ですよ」

お城の一室。

日向とペローは、シンデレラを連れてお城へと戻ってきていた。

もちろん、シンデレラには慰謝料を渡すから、と言って。

「靴合わせは終了させておきました。シンデレラも見つかった事ですし、もう必要ありませんからね」

「見つかったのは見つかったけどさ、これからどうすんだ？
あいつに慰謝料渡すのか？」

別室にいるシンデレラを思い出しながら、日向は疑問を投げかける。

「ええ、渡しますよ。」

結婚という名の慰謝料を」

.....。

「結婚すればお金はシンデレラにも入ってきますからね。

一石二鳥です」

「一石二鳥です、じゃないだろ。あいつがそんなこと許すわけないだろ」

死んでも嫌だと言われたんだぞ。

「大丈夫です。やってしまえばこっちのものですから」

「最低だな、お前」

「仕事です。それに『シンデレラ』の物語は結婚が終着点ですから。そこまで行ってしまえば、ハッピーエンドで即終了です」

あと少し、ですねーとペローは満足げだ。

俺が痛い目を見る前に終了にしてくれよな、マジで。

日向は何事も起こらず、無事に終われることを、ただただ神に祈るのだった。

数分後。

お城での結婚式の最中。

「あんた、また騙したわねえーっ！っ！！！」

と、

シンデレラの叫びがお城中を響き渡ったのは、言うまでもない。

シンデレラ After (前書き)

シンデレラAfterです。

前回で『シンデレラ』は終了したので、
これはその後のペローのちよつとした話です。

ほんとにちよつとです。

ペローはきつとこれからもお仕事、頑張ってくれるでしょう。
という願いを込めて。

では、どぞ。

シンデレラ After

「これが今回のシンデレラ物語です。
お納め下さい」

日向の記憶が入った緑色の珠を、ペローは上司に渡す。

「ご苦労」

上司は緑色の珠を受けとる。

「今回は女じゃなくて男を連れて来たみたいだな」

「はい。ちょっと雰囲気を変えてみようかと思ひまして」

トラブルで日向が来てしまったことは内緒だ。

見られたら結局バレてしまうのだろうか。

「ふむ。後でじっくり見させてもらうよ」

上司は笑う。

「お前も役として出てるそうだな？」

「：はい。雰囲気を変えようと思ひまして」

くそ。

緊急事態だったとはいえ、役として出てしまうとは一生の不覚。

上司はなおも笑い続ける。

「楽しみだ。次回も期待しているぞ？」
「はい」

上司は消える。
ペローはため息をついた。

やっぱり転職、

考えようかな。

p r e l u d e白雪姫（前書き）

この話は、

日向が『白雪姫』の物語に入る直前の、学校での話しです。

なので、「p r e l u d e」

その前に、って事ですね。

学校の名前とか、軽く適当に考えて出しました。

あと、他の絵本部部員とか。

「p r e l u d e」が終わったら、本格的に『白雪姫』の話しに入ります。

prelude白雪姫

「ぐうあー…眠い」

ひなたこう

日向紘、

16歳。

只今絶賛部活動中。

「ちゃんとやろーよ、紘君」

「もーいいじゃん。」

どうせまたやられるって」

イタズラ。

「そんなことないよ。今度は『綺麗に読んで下さい』って紙張っとくし」

笑顔でそう言う男に、
無駄だと思うけどねー、と日向は心の中で思う。

ここは日向の通う高校。

『第三北高校』

夏休みも終わり、新学期が始まっている。

だが、

まだ夏休み気分の浮かれ野郎がいるらしく、日向達絵本部が作った制作物、その名も『姫夢の明るい1日』が壊されるという被害を受けた。

「壊されるって言っても、少し落書きとかされただけじゃない」

日向と同じ絵本部部員、

坂木悠太が「そんな大袈裟なー」と笑いながら言う。

坂木悠太は日向と同じ1年の絵本部部員仲間。おっとり系のぽっちゃり系で、

モテるかモテないかで言えば、『モテない』方の人種だ。

そんな坂木を見ながら、日向は腕を組み「気に入らないんだよ」と言う。

「俺の描いた絵に落書きしやがったんだぞ。壊されたと言っても過言じゃない」

「一応僕や咲さんも書いたんだけど」

咲さん、とは。

同じ絵本部部員で、一つ上の先輩、山本咲先輩のことだ。

坂木と山本先輩は幼馴染みらしく、昔から仲良らしい。
なので「咲さん」「悠君」呼び。

ちょっと羨ましい。

とか、決して思っていないぞ。

「まったく。俺の描いた絵を馬鹿にしゃがって。

見つけたらただじゃおかねー。誰だか知んねーけど」

「ただじゃおかなくて、何するの？」

「なんかだよ、なんか」

夏休みの制作物。

『姫夢の明るい1日』

ちなみに、当たり前だが絵本だ。

いわゆる飛び出る絵本的な物で、夏休みの部活中はずっとこれを作っていた。

絵本部として始めての大イベント、活動大作としてこの絵本は学校に展示される事となったのだが。

その絵本に落書きを発見したのは、つい1週間ほど前の事だ。

見つけたのは日向の担任の、金髪先生。偶然廊下を通りかかった時に見つけたらしく、日向に教えてくれたのだが。

活動大作、『姫夢の明るい1日』に力を入れていたのは、なにも日向だけではない。

坂本も山本先輩も日向と同じぐらい、

もしかしたらそれ以上の力をこの絵本に入れていたのだ。

いくら落書きが少しだけで、直すのにも時間がかからないからといって、

絶対に許してはいけない。

「ところで、山本先輩はまだなのか？」

授業が終わってから、もうすでに30分以上はたっている。学年が違うので、何か別の授業でもあるのかもしれないが。

「今日はトイレ掃除だから遅くなるって言ってたよ」
「そっか」

トイレ掃除か。

じゃあ遅くなるだろうな。

この学校がトイレ掃除にかける気合いは、実は半端ない。
隅から隅まで、

まさに、地面から天井まで綺麗に掃除をしないといけなく、

掃除が終わると、先生の最終チェックが入るという最後の難関つきだ。

なので、

トイレ掃除の担当になった生徒は、必ず部活に遅れる。

「できたー」

坂木が絵本修繕を終わらせたらしい。

「おつかれ」

「ありがとー」

「無駄な努力にならなきゃいいけどな」

「大丈夫だってば。」

先生達も学校中に注意してくれたし、貼り紙もバッチリ貼ったから」

見ると、『姫夢の明るい1日』が置かれている机の端に、

『イタズラするべからず！綺麗に読んでね』

と、書かれた可愛いイラストつきの貼り紙が貼ってあった。

「貼り紙なんてものはな、女が使ってるダイエットの薬ぐらい効果がないもんなんだよ」

「それはあまりにも偏見すぎだよ」

「うるせー」

ぷいっとそっぽを向く日向に呆れながらも、坂木は苦笑する。

「じゃ、戻ろうか」

「ああ。新しい絵本の続き、作らないといけないしな」

「話しは考えたの？」

「んー……。 」

まあ、そこそこ」

絵はいいんだが、

問題はストーリーなんだよなあ。

「はあ」とため息をつきながら、坂木と教室に戻ろうとした日向だったが、

同じクラスの月島月菜つきしまつきなが日向に声をかけてきたので、足を止めざるをえなかった。

「日向！ちょうど良かった」

「月島、どーかしたのか？血相変えて」

何かあったのか？

「あれよっ！あれが出たのよー！！」

あれ？

「あれって何だよ？」

「あれはあれよっ。いいからこっち来て！」

月島に引っ張られるようにして日向は走り出す。

「月島っ、ちょ…坂木っ、悪い。先行っといってくれっ」
「うん。わかったー」

のんびりと手を振る坂木を残して、
日向は月島に、ある場所へと連れて行かれるのであった。

「おい……何で俺が」

「いいから早くっ」

「いや、でも、ここは」

「私達がいいって言ってんだから大丈夫！だから早く……って、ギ
ャーアアア！！」

飛んだ飛んだとんだああー！！」

「……………」

生徒が使うトイレのうちの一つ。
北校舎の一階、女子トイレ。
そこに「あれ」は現れた。

「綺麗にしてる、ってのに何で出るんだよ」

「し、知らない。外からでも入ってきたんじゃないの？」

ぐいぐいと日向の背中を押しながら、月島は手に持った『○キブリばすたー』を思いきり振る。

「それ、あるんなら俺じゃなくてもいいだろ」

「駄目よ！これは近付かないとかからないんだから。無理よ、近付くのは無理よ」

月島と同じトイレ掃除の他の女子達は、トイレには一切近付いてこず、遠巻きに日向と月島を見ている。

「がんばれ」

「男でしょ」

「早くしてよ」

「あんたしかいない」

「さっさとやれ」

などなど、

様々なエールを受けながら、日向は月島から「○キブリばすたー」をもらい、一人女子トイレへと浸入していくのだった。

なんで俺がこんなこと……。

日向は壁に張りついている「あれ」に近付く。

ブシューウウウウウ。

黒い「あれ」は動かなくなった。
日向は任務を達成した。

「終わったぞー」

「捨てて」

「は？」

「捨ててっ！」

何で俺がそこまで。

トイレに備え付けてあるほうきと塵取りを取り出しながら、日向はぶちぶちと文句をいいつつも、

「あれ」を塵取りの中に入れ、トイレから出る。

そして、一人トイレの近くで見守っていた月島に塵取りを突きつける。

「ほい」

「ギャー！！」

馬鹿！こっちに持ってくんなっ」

「……あのなあ」

「早く外っ、外に捨ててきて！」

はいはい。

解りましたよ。

日向は女子達にお礼も言われぬまま、外へと追いやられてしまったのであった。

「ったく」

日向は、黒い「あれ」を外にあるゴミ収集場に捨ててから一息つく。

何で女はあんなに煩いんだろう？

あんな物ぐらいでギャーギャーと騒いで。

疲れないのかねー。

疲れないんだろうなあ。

「はあ…」

日向を女子トイレへと無理矢理連れて行った、同じクラスの月島を思い出す。

月島だけは、日向が「あれ」を退治するのをトイレ近くで見守っていた。

連れて来た者の使命感なのか、それとも日向がちゃんと「あれ」を退治するのを見張るためなのか。

ぼけっとそんな事を考えていた日向が、さてそろそろ戻ろうかと思った時、

持っていた塵取りに何か光る物が引っ掛かっているのが見えた。

「なんだ？」

なんの気はなしに、

日向がそれに触った瞬間、

強い光が、
辺りを包みこみ、

日向はその場から消え失せた。

p r e l u d e白雪姫（後書き）

「p r e l u d e」終わりです。

こんな感じで、日向は物語の世界へと入って行きます。

そして、次から『白雪姫』が始まります。

うん。

多分。

白雪姫

「こりない人ですね、日向様」

目の前の男は呆れを全面に押しだしながら、日向に喋りかけてくる。

「俺だって来たくて来たわけじゃない。今回は運が悪かったんだよ。まあ、前回は運が悪かったんだけど」

「とかなんとか言いながら、本当は来たかったんじゃないですか？」
「殴るぞ」

ここは白雪姫の物語の中。

周りを森で囲まれた家に今、日向達はある。
何故このような事になったのか。

順を追って説明しよう。

日向が見つけた、

塵取りに引っ掛かっていた光る物。それは『鍵』だった。

赤い石が付いた金色の鍵で、いかにも女の子が喜びそうな綺麗な鍵。

その鍵は、綺麗な外観とはうらはらに、人を物語の世界へと引きずり込む、
本性は悪魔のような鍵だったのだ。

「悪魔だなんて失礼な」

「俺にとっちゃ悪魔なんだよ」

「ロマンチックドリームの鍵ですよ」

「どこがだ」

とにかく。

その鍵に触れてしまった日向は前回と同じく、
ここ、

物語の世界の中へと来てしまったわけなのだが。

「ちょっと疑問なんだけど」

「なんですか？」

「前の記憶はなくなった筈なのに、なんでまた思い出す事ができたんだ？」

日向は前回、『シンデレラ』の物語でこの世界にお世話になった事がある。

だが、元の世界へと戻された時、記憶は消されたはずだったのだ。

実際、またここに来るまで日向の頭の中にはそんな記憶、少しも覚えていなかったのだから。

「記憶の現元は、私の上司にすでに渡してしまっていたので無かったのですが、コピーをちゃんととってあったのですよ。
なので、それを日向様に植え付けました」

植え付けたって。

「いちいちまた最初から説明するのも面倒だったので。一石二鳥です」

いやいや、

二鳥にはなっていないだろ。言葉の意味間違っていないか？

こんな話しをしているこの男、名前をペローと言うのだが。

この男の仕事は『物語の管理人』。

担当している物語の、登場人物になりえる人を探しだし、連れて来て物語を進める。

物語が終わったら、連れて来た人の物語の中の記憶をもらい、元の世界へと帰す。

そしてまた新しい登場人物を探しに行く。
その繰り返しだが、この男の仕事となる。

ちなみにペローがもらった記憶はその人の中から消えるので、記憶消去となり、この世界での出来事は完全に忘れてしまう、という事になる。

「これが一石二鳥ってやつだ。ペローも仕事が完了して、連れてこられた奴の恥ずかしい記憶、思いだしたくない過去も、そいつの中から末梢される」

これがほんとの一石二鳥。

「恥ずかしい記憶って。そう思ってるのは日向様だけです。女の子達は気に入って、楽しそうにしてくれてますからね」

むしろ、記憶は残しておいてくれて女の子の方が多いんですから。

若干自慢気に言う物語の管理人、ペローに日向は冷たい視線を送る。

「俺は男だ」

「知ってますよ」

「こんな女女した物語、気に入るわけないだろ」

「そうですね」

だから、今度は失敗しないように、女の子しか行かないような場所に鍵を置いておいたのに。

「日向様が見つけてしまわれるからですよ」
「……………」

そうなのだ。

前回は地面に落ちていた金色の鍵だったが、今回は『女子トイレの中』。

正確には、『女子トイレに備え付けてある塵取り』に引っ掛かっていたのだが。

「普通、男は見つけられませんよ」

「……………」

「もしかして盗撮とか、犯罪になるような事、してたんですか？」
「違うっ！」

解っているくせに、
ほんとに嫌味な奴。

日向は女子トイレで、犯罪行為をおこなっていたわけではない。
そんなこと、これから先も一生ないだろう。多分。いや、絶対。
日向はただ、同じクラスの月島に頼まれ、『黒いあれ』を退治していたのだ。女の子が苦手な『黒いあれ』を。

今思うと、

なんだって俺にそんな事頼んできたんだよ、
そのせいで俺は…、と月島に文句の一つでも言いたくなる。

戻ったら言っでやる。

絶対に言っでやる。

そんなこんなで。

日向は2回目となる女女しい物語を、進めなくてはいけない事と相成ったのだ。

「今回もシンデレラなのか？」

隣にいる嫌味な奴、
ペローに聞く。

見たところ前回とは場所が違っていた。前は『お城』だったのだが、今、日向がいるここはメルヘンチックな一軒家、だ。

人形やら置物やら小物やら、ファンシーな物がたくさん置いてある。
女の子の家、だろうか。

「いえ、今回は」

ばったーんっ！！

ペローが言うよりも前に、勢いよく家の扉が開かれ、外から叫び声が聞こえる。

「たっだいまぁー！」

「疲れたー」

「楽しかったねー、また行こうよおー」

「わっ、足踏まないで」

「早く入ってえ」

「ごめん」

「邪魔あ」

「早くー」

たくさんの小さい、色とりどりの三角頭巾を被った子供が騒ぎながら入ってくる。

その後ろから、

黒髪の、ふわりとしたエプロンドレスを着た美しい女性が微笑みを浮かべながら、入ってきた。

「慌てないで。ゆっくり歩きましょう。お留守番ありがとう。何もなかった？」

女性は日向に視線を向け、天使のような笑顔で問いかけた。

まさに女神。
天使って言ったけど、
やっぱ女神。

「……ペロー」

女性をぽーっと見ながら、日向はペローに話しかける。

「今回は『シンデレラ』ではなく、『白雪姫』ですよ。日向様」

白雪姫。

………ん？

お留守番ってなんだ？

「今回、日向様の役柄は
小人。」

突然変異で、他の小人よりでかく成長した、
こびと小人改め、
へんびと変人です」

決して、

変人^{へんじん}って呼ぶわけじゃないですからねー、とペローは笑顔で言う。

「……ペロー」

「なんですか？日向様」

ふざけんなっ!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3543s/>

日向の王子物語

2011年5月14日13時14分発行